

## 第9回テニス学会に参加して

関矢 寛史（広島大学）

道上 静香（筑波大学）

日曜日の朝早くから会場狭しと、多くの人たちが稲垣正浩氏（日本体育大学）による講演『テニス起源論をめぐる謎について』を聞きに集まりました。

この講演では、稲垣先生ご自身の海外での現地調査に基づく、テニスの起源についての興味深い仮説が発表されました。それは、固いボールを素手で手を腫らしながら、時には血を流しながら打ち合うというバスク民族のペロタという荒々しい競技が、現在のテニスの起源であろうという仮説です。たくさんの絵や写真をスライドで見せながらの発表を通して、自分たちが今プレイしている“テニス”とは何なのかについて再考するよい機会だったと思います。

講演に引き続き、『テニスでメシが食えるか…?』と題したシンポジウムが開かれ、午後は口頭発表、ポスター発表、オンコート発表が行われました。紙面の都合上、今回は口頭発表とオンコート発表のいくつかの研究に的を絞って感想を述べさせていただきます。

### 《 口 頭 発 表 》

徳永氏（九州大学）の口頭発表『ジュニアテニス選手の心理的スキルの診断とその活用法』では、徳永氏を中心とする九州大学の研究グループが開発した精神力を測る質問紙の利用方法が紹介されました。全国大会への出場回数と精神力に強い関連があること、また、中牟田杯に出場した選手では、女子選手の方が男子選手より精神力が強い傾向にあったことなど、興味深いデータが紹介されました。メンタル・トレーニングの必要性を再認識させられる研究発表でした。

松枝氏（ウェルラケットクラブ）の口頭発表『テニスにおけるインターネットの利用研究』では、ホームページ“インターネット・テニス・ジャパン”を運営する際のアイデアや、現在の利用状況などが発表されました。私にとって特に興味深かったのは、ビデオに撮って送られてきたプレイの映像が、エキスパートのアドバイスと共に動画として掲載されるという“ビデオクリニック”でした。雑誌などの技術解説ではイラストや写真が限界ですが、インターネットでは流れのある映像として情報を共有

できることが強みだと思います。静止画や言葉では伝えにくい動きの流れを動画で伝える方法は、テニスのスキルの向上にとって非常に有効だと思います。

## 《 オ ン コ ー ト 発 表 》

オンコート発表というテニス学会独特の発表会場では、デモンストレーションを中心に様々なアイデアが発表されました。

まず、大島氏（トレーニング科学研究所）のグループは、『ひねりトレーニングマシン』を用いたトレーニングによって、テニスのストローク時の筋の活動様式をシミュレートしたトレーニングが行えることをデータを基に発表されました。

次に、友末氏（スポーツ医・科学研究所）のグループは、『打球スピードを高めるための指導法—ひねり動作と下半身のバネに着目して—』と題し、グラウンド・ストロークにおけるひねり動作の重要性を発表されました。過去から現在までのストロークの打ち方の変化をデモンストレーションしたり、また、友末氏の上半身にひねり動作で使われる筋の輪郭をマジックで描きデモンストレーションを行うなど、分かりやすくかつ面白い発表でした。

また、テニスクリエイションのみなさんによるサービス・リターンやサービスに関するオンコート発表も大変分かりやすいものでした。

\* \* \* \*

ここまでいくつかの研究発表の概略を書きましたが、今後のテニス学会の研究発表の在り方についての私の意見も、2つほど述べさせていただきたいと思います。

まず1つめは、本学会には口頭発表、ポスター発表、オンコート発表、講演、シンポジウムなど様々な発表の場がありますが、発表の場の至適性の問題があると思います。今回もオンコート発表の方が適切であろうと思われる発表が他の場で行われたり、その逆もあったように感じます。

2つめは、どこまでデータに基づいた研究を発表するべきかという問題です。まったくのアイデアだけでよいのか、それともある程度のデータを示して、より説得力をもった研究発表にするのかという問題は、これからのテニス学会の進む道を大きく左右すると思います。

学会としての研究発表の質の向上をめざすのであれば、最低限のデータを示す必要があると思いますが、現場と研究の橋渡しの役割も学会の主旨であるので、あまり堅苦しくなっても発表数が減ってしまうという怖れもあります。

そこで1つ提案ですが、口頭発表やポスター発表はあくまでデータに基づく研究発

表の場にし、オンコート発表や、その他に「アイデア発表」とでも名付けた発表の場をつくり、それらは必ずしもデータに基づかない斬新なアイデアを積極的に発表する場にしたらよいのではないかと思います。

最後に、研究発表をされたみなさん、たいへんご苦労さまでした。やはり自分で発表することが大切だと思いますので、私自身も含めて次回の学会で研究発表の数が増えることを願って、傍聴記の終わりにしたいと思います。

(せきや ひろし)

